

特集：〈資料紹介〉ミス・カートメルの遺品 —ブロムさんからの寄贈品—

はじめに

2010年12月、史料室にミス・カートメルの遺品の数々が届けられた。それは、有賀誠一牧師がブロムさん(Anstice Blom)から「東洋英和に」と預かって来られた品々であった。ミス・カートメル自筆のメモがあり、カートメルに宛てた様々な筆跡の書簡があり、写真や切り抜きのスクラップもあり、小さなカード帳のようなものもある。さながらお宝の開帳のようであった。

ブロム夫人は、ミス・カートメルの妹アメリカ(Amelia)の娘メイベル(Mabel Pescott)の孫にあたる方で、ハミルトン市の近くにお住まいである。ミス・カートメルは晩年をメイベルの家で過ごして1945年に亡くなったが、メイベルが大事にとっておいたミス・カートメルの遺品(メイベル宛ての書簡も含む)はその孫に引き継がれていた。カートメル愛用のロッキングチェアもブロム家で使われていたが、これも東洋英和に2011年11月ご寄贈くださっている。



ミス・カートメル 1932年撮影
1845-1945
(今回受贈)



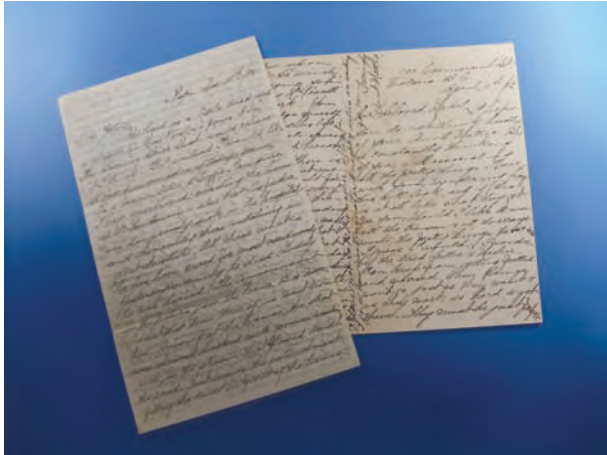
アンスティス・ブロムさん

【ブロムさんからの寄贈品リスト】

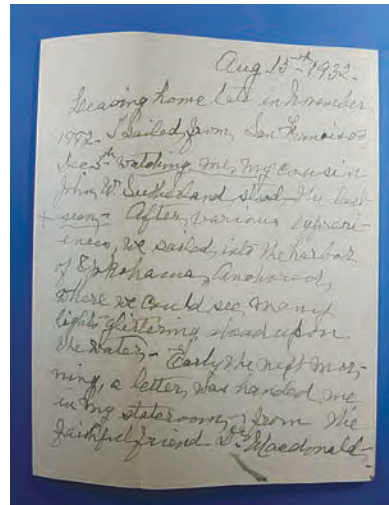
- ・カートメルのロッキングチェア
- ・書類

カートメル自筆のメモなど	12点
カートメルの書簡	6点
カートメル宛ての書簡・グリーティングカード	19点
メイベル・ペスコットあて書簡(カートメル以外の差出人)	3点
小冊子 (マクドナルド博士の伝記、東京女子大学設立準備報告書)	2冊
議事録と思われるもの	3点
WMS(注1)関連の書類ほか	7点
- ・新聞切り抜き 2枚
- ・プリント写真 15枚
- ・カートメル肖像写真版 1点
- ・その他

〔注1：WMS(Woman's Missionary Society of Methodist Church)：
カナダメソジスト教会 婦人伝道協会〕



自筆の書簡 1892年・1895年



自筆・回想メモ ①
1932年記 横浜到着のくだり

今号では、ご寄贈を受けた遺品の概要と、読み起こしのできた内容などから、一部を紹介していきます。

1. ミス・カートメル自筆のもの

*回想メモ—東洋英和創立のころの生き生きした描写

何回か別の時期に書かれたかと思われるメモが5点ある。女学校開校にいたるまでのいくつかのエピソードはカナダ本国への報告にも書かれていたものと重複している。日本への支援をアピールするためにWMSの会合や教会で講演をなさることもあったであろうし、英和から開校当時の様子を教えてほしいと頼まれて原稿を書かれた下書きも含まれる。だんだん目を悪くし高齢となって字が踊っており、このメモを読み起こすには大変な努力が必要である。

□横浜到着のようす（以下、青字は引用翻訳）

〈1882年11月下旬に私は故郷を離れ、サンフランシスコから出航しました。12月5日、従兄弟のジョン・W・サザラードが見送ってくれましたが、それが北米の見納めでした。航海中、様々なことを経験しましたが、ようやく横浜港に入港しました。眼前の海面には、沢山の明かりが映りきらめいていました。

翌日の朝早く、船室に、私の誠実な友人、マクドナルド氏から手紙が届きました。手紙の中で彼は大歓迎だと私を安心させてくださいました。もう何日も船の到着を待っていた、船が港

に錨をおろしたと知って、次の日、三度目になるが、東京から蒸気船の停泊地まで来てくださるとの内容でした。そして朝食の後、イービー氏とともに船にお見えになりました。後から入ってきたイービー氏は骨折したとかで松葉杖をつけていらっしゃいました。一本遅い汽車に乗ったミーチャム氏は波止場でお待ちになっており、私のトランクを検査するお役人をじっと見ていました。初めて人力車というものに乗って横浜の街を回った後、私の三人の宣教師仲間、私の意見を聞いて、お昼ご飯に「外国」のテーブルのある和室へ案内してくださいました。グレイヴィーソースの味は、私が今まで食べたものとは違っていました、すべてがおいしゅうございました。

昼下がり、私たち一行は東京駅（注2）につきました。そこで私は、周囲の人々の足下を見てごらん、とマクドナルド氏に言われてそのとおりにしてみました。

あの音がどこでしていたのか分かりました—日本の「下駄」（靴）だったのです。私たちは群衆を見ていました。皆、無口で、駅の中へと通り過ぎて行きました。〉

〔注2：東京駅は開業前のため、他の駅の記憶違いでは？〕

□青年たちに英語を教える

〈（マクドナルド氏がやってきて、若い日本人の男性グループが礼儀正しく英語を教えてほしいと懇願していることを伝え、）「君は日本語ば

かりを勉強しているわけにはいかないよ、息抜きをしなくては。そして、多分、この若い男たちの誰かが君の最初の改宗者になると思うよ。彼らは君が求めることは何でもする、と約束する。」とおっしゃいました。そして、彼らはすぐに私の家に隣接している小さなチャペルで行われるキリスト教の礼拝に出席することに同意したのです。また、英語の聖書研究の授業を受け、日曜礼拝に出席することにも同意しました。

英語は私にとって息抜きでした。私は授業の発音練習で「L」の音に関してうるさく言いました。私は、日本語には「L」にあたる文字がなく、漢字には「U」の文字がないのに驚きました。生徒たちが、「L」の音を発音するときは、舌の先を口蓋につけなければならないことを理解したとき、私は、何か一つのことを達成したと強く感じました。)

□女学校開校のための土地購入のいきさつ

このメモは、おそらく1933年に軽井沢から発信されたミス・ハミルトンの手紙に同封されて返却されたもので、創立50周年を迎えるにあたり、当時校長であったミス・ハミルトンから依頼されて書かれ、ご用が済んだ後、ミス・ハミルトンから返されたものと思われる。(その手紙については、「史料室だより」No.77で紹介している。) 内容が「五十年史」記載 (p.72-73 村岡花子訳) とほぼ一致している。

□バイブル・ウーマン (伝道をする女性) の養成—偏見を乗り越えて

〈スペンサー先生は (1885年) 2月の第3週に来日され、学校関係の仕事をこの上なく有能に執り行い、また、カックラン氏の二人のお嬢さんたちは初心者に英語を教えるのを手助けして下さるような熱心な協力者でもありました。このようにして、私は少し自由に使える時間もできたので、私の希望でもあった家庭の婦人たち—たとえ、夫や息子が一緒でも教会に足を運ぼうとはしなかったような婦人たちのために働くことができるようになりました。私はそれまで日曜学校に娘たちが通うのを見たことがありませんでした。来ているのは夫に伴われて赤ん坊を連れてくるような婦人達だけでした。

その年の協議会が麻布で行なわれることになっていましたので、私はその協議会で発言させてほしいと願ひ出る手紙を書きました。返事が来て、代議員のみなさまがいらっしゃる席に私の希望を説明するために招かれました。部屋では4人の若い男の方たちが待っておられました。挨拶をして教会においてキリスト信者の婦人が福音を宣べ伝える働き人となるようにしたいという私の望みをお話し致しました。すると私はある牧師さんにさそわれられました。「ああ、カートメル先生、あなたは日本の婦人をご存知ない。彼女達にそんなことできやしませんよ。無知な人たちですからね。」私は口を閉じ、



東洋英和学校の初め (今回受贈)
The beginning of the Boys' school, Azabu Tokyo 1884と記入あり
右から3番目がおそらくミス・カートメル。西洋人はカックラン氏と家族、ホイティングトン氏。



人力車上のミス・カートメル
同乗者はバイブルウーマンの和田姉

しばし時間をおいて、それからお辞儀をして部屋を退出しました。驚いて一言もいえなかったのです。きっと、部屋の中にいらっしゃった方たちも同様だったことでしょう。

5時過ぎに、指導的立場の平岩牧師にお会いして協議会へのメッセージを伝えるようにとの連絡を頂きました。私はこう切り出しました。「平岩牧師、あなたの教会には、救い主に新たに出会ったことを心から喜びあなたが聖書の解き明かしをなさるのを心躍らせて聞いて、隣人や友人のもとに福音を携えて訪れ、『あなたも是非教会にいらしてください。』とお誘いするようなご婦人がひとりもいらっしゃらないのですか」と。考え深げに平岩牧師はこれようにお答えくださいました。「カートメル先生、私の教会にも、そのようなご婦人はいらっしゃいますがね。あなたのところに、その婦人を行かれますので、簡単な聖書の勉強を受けさせていただいて、彼女が友人に聖書を読み解いて、その友人を教会に連れてくるようになるよいのですが、いかがでしょう。」と。「私もそれがよいと思います。喜んで報酬を払いましょう」と申し上げました。「いいや。とんでもありません。そのような務めを果たしてくれそうな人ならいくらでもいますよ。」と平岩師。「しかし貧しい女性には、時間に見合う代償を払う必要があるかもしれません。」と私が申しますと、「そうですね。」とだけ彼は答えました。月3円の報酬になりました。

そこで、その仕事が始まりました。イービー氏が、甲府にいる一人のクリスチャンをすぐに招待しましょうと伝えてくださいました。最後の消息では、その聖書を伝道する女性は喜びに満ちた宣教の業のうちにすっかり年老いてし

まっていますが、未だに他の人たちを教会に招き指導していらっしゃるのとことです。私に「女は無知だ」と即座におっしゃった例の若い牧師さんは「指導的なクリスチャンの女性はよこんで人々を教会に招く奉仕をしてくださっています。」と私に伝えに来てくださいました。

ここでは、伝道のために働く女性を得るのに、一時男性の偏見にぶつかるがめげることなく目的を達したことが書かれている。カナダにおいては（また現代でも）考えられないような差別的発言が当時の一般的認識だったこともわかる。それこそ、教育から締め出されていた日本の女性の置かれた境遇であった。

□困窮家庭への援助—地域社会への奉仕の実践

〈宣教師とクリスチャンの先生たちと熱心な上級の生徒達は、よこんでCS（教会学校）の先生になります。あるとき、食い扶持を稼ぐため赤ん坊を背負いながら道を歩いては自分と二人の子ども達のために路上のゴミを集めている貧しい女性がいました。上の女の子は5歳でとてもいたずらなため、近所の人たちは母親が夜の何時に戻ってくるのかと文句を言っていました。しかし、その日はゴミ集めの収穫がないまま帰ってきた母親は、こんなことでは子どもを売らなくてはならないと言ったのです。これを聞いた我が校のクリスチャンの奉仕者たちは先生に報告し、ラーズ先生（旧姓スペンサー）はすぐに手を打ったのです。部屋を借りて母親代わりになってくれるクリスチャンの女性を雇いました。クリスチャンの生徒のうち、1、2名がその子ども達に毎日のように読み書きや行儀作法を2時間教えました。

ある家庭では、その子ども達の実母はすでに亡くなっていて、病弱な父と義理の母が二人の娘を育てていました。上の娘は施設に引き取られたのですが、後日その家庭のようすを観に行ったオヨウさんは、一家が困窮している様子を知りました。子どもは食べ物があほいといっ泣いていて、困り果てた父は、この子を売るしかないと言ったというのです。この二番目の娘も施設に入ることになりましたが、彼女は熱心な生徒だったので、学校の寮に引き取られ、卒業しました。そして、めでたく結婚しました。ある日曜日、洗礼式が執り行われたときに、この人は自分の息子に洗礼を受けさせるために牧

師に委ね、再び手元に息子が戻ってきたとき、集会で半生を振り返って涙ながらに語りました。「私にキリストを愛する事を教えてくださった宣教師の皆様がいらっしゃらなければ、私は身を落として売られてしまうところでした。それなのに今、こうして息子も洗礼をさずかりました。いかに神ご自身が学校、孤女院、福音伝道の働きの中で働き導いておられるかということをこのことが示しています。』

このエピソードは、宣教師達が学校教育と同時に地域の福祉にも積極的に取り組んでおり、生徒も見習っていたことを示している。戦前の女学校には、上流の子女だけでなく、支援を受けていた（給費生）貧しい家庭の子どもたちも在籍していた。

□小林富子の鎌倉行き

このエピソードでは、女学校において敬愛されていた小林富子教諭が病を宣告され、校長のブラックモアの計らいで今諏訪せい教諭のつきそいで鎌倉に保養に行き、そこで亡くなられるまでのお寺の僧侶との交流が描かれている。

〈小林先生は教師としてのみならず舎監という全生徒達の母として25年間お勤めくださり、信仰深く、信頼できる方でした。

小林先生が視力が落ちたのに初めて気付かれたのは1920年の春のことでした。眼科医に見て頂くと、率直に「この病気によって遅かれ早かれ失明することになるが、養生して、ストレスのないように仕事を控えれば失明の時期を遅らせることができると思う。」と診断されました。ひやひやししながら注意深く生活していらしたも

のの、仕事を愛していらっしゃったので、いままでもおりでどこでも献身的に、仕事を続けられました。

2、3ヶ月して、小林先生は以前「失明しないように養生しなさい」と命じた眼科医に病状を伝えました。眼科医は小林先生ではなくおせいさんに「驚かないでほしいのですが、このままでは死んでしまいますよ。」とおっしゃったのです。「もし小林先生が生まれつき頑健であれば、長生きするかもしれないけれど、心の準備はしておくように」ともおっしゃいました。この報告を受けたブラックモア校長は、小林先生とおせいさん両名をすべての勤務から解いて、ちょうど在学していた小林先生の2人の姪御さんと一緒に最も近く、最適な海辺の保養地である鎌倉——日本では観光客に良く知られている歴史的に有名な大仏があるところ——に向かわせました。

鎌倉について始めは快適な宿を見つけられなかったのですが、町から坂を上った木立に囲まれたお寺の僧侶が彼女達のことを聞きつけたのです。菅原和尚様は東京の基督教女学校からやって来た女性達が夏の間泊まる部屋を探していることを聞くと、すぐに彼の自宅を提供してくださいました。和尚様と奥様のご親切に、一行はこの上なく喜んで感謝申し上げました。

彼らは西洋式の教養を身につけた人たちを迎えられたことを喜んでくださいました。彼女達がキリスト教徒だからといって、よそよそしく特別扱いすることはありませんでした。実際、朝夕の祈りのときや日曜礼拝のために讃美歌を歌うと、菅原さんご一家はどこへでも心から嬉しそうにして集まっていたらっしゃいました。

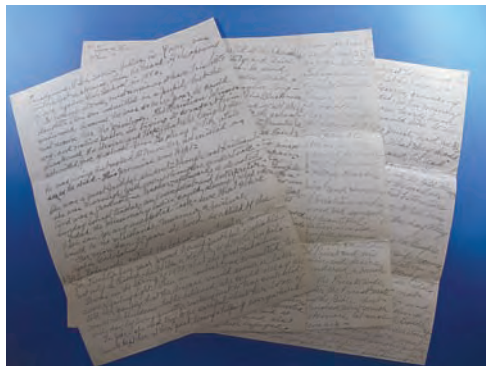
小林先生たちは、驚き、また喜んでいただいたの



小林富子
(在職1895年～1920年)



建長寺



自筆・回想メモ ②
執筆年不明 小林富子の鎌倉行き

ですが、打ち解けて話していたときにふと和尚様が説明して下さったことで初めてその理由がわかりました。和尚様も奥様も青山学院で教育を受けたので、外国人のこともキリスト教の教えもよくご存知で、それで二人とも喜んで下さっていたのだそうです。

この話は、小林先生の臨終とご葬儀、引き続きミス・ブラックモアと菅原和尚との信仰問答に発展していく。この物語は「五十年史」にも記述がある。建長寺の和尚のキリスト教への寛大で柔軟な姿勢に驚かされるが、当時の知識人のひとつの形とも見られる。

* 創立25周年を祝す東洋英和女学校へのメッセージ (1909年) (タイプ打ち下書き 抜粋)

〈私ども女性宣教師の働きの陰に神様が恵み深く手を差し伸べて導いてくださっていることを更に見て参りましょう。現在の美しい校舎になるまでの歴代の校舎を写真で見ると、学校の成長の様子が手にとるように解りますし、その上静岡、甲府、金沢、長野、上田の学校もあわせれば拡張もしてきていることが解ります。

神様は寛大にも私達の判断の誤りや思い違いや罪をすべて覆い隠し忘れるようにしてくださいました。そして、神の恵みが義の実に宿るようにしてくださいましたのです。

報告書を拝見すると私は感謝に満ちた喜びで満たされます。学校、福音宣教活動、幼稚園、孤児院、昼間および夜間の実業学校、そして我が校のクリスチャンの生徒達が御言葉を小さな子ども達に教えるために学ぶ日曜学校などの詳細が目に見えようです。しかし、それにも増して、私は教師の皆様や教えていらっしゃるの心髄に神様ご自身が働いていらっしゃるのを見るのです。我が校のクリスチャンの生徒によって成し遂げられる働きは、いかに神様が彼



当時の校舎 (1908年増築)

女達とその精進を豊かにお恵み下さっているかを表しているのです。神様は御言葉を従順に受け入れるすべてのものの心を聖別して下さるのです。神様は真実を愛するものすべてに喜びを与え、年老いたものには彼らの家庭において、子ども達には無垢で全面的に信頼する純粋さにおいて、その喜びを与えたもうのです。

子どもにはよき導き手が必要なので、「子ども達をイエスのもとに連れてくる」ことが求められているのです。人生の師、人生の庇護者はたとえ職業についたとしても必要です。

クリスチャンの生徒達が決してこの教えに倦むことなく、すべての人の救い主である方への信仰と愛によって強められて、どこにいても、また教え続けることが出来ますように、そのときこそ、日本はよき国となることでしょう。

私に面識のある生徒の皆様申し上げますが、私の愛は一層強められております。

若林里雨(おりう)さん、山中おようさん、杉本お市さんは私のメッセージを会う方々、手紙をお書きになる相手の方々にお伝えください。

私はクリスチャンの母をもつ幼い子ども達が、毎日のようにイエスを愛し、正しい行いをするように、と教わるようになることを思うと心が躍ります。

愛する生徒の皆さん、あなたがたを邪魔したり勇気をくじかせるような物に心を許してはなりません。神様は人々の心を勝ち取ることがおできになるのです。私は確信しています。なぜなら神様は、神様を愛し、罪を怖れることを家庭をとおして私に教えてくださったからです。〉

この時、女学校はブラックモア校長の下、確実な歩みをしていた。文面にも、神のお守りのうちにある感謝と、聖書に基づいた教育の重要性を確認する言葉があふれている。多くの協力者への感謝が連ねられ、常に祈りの中に東洋英和を覚えておられる様子がうかがわれる。

* 姪 メイベルへの私信 数通

メイベルが牧師のウォルター・ベスコット氏と結婚することが決まった時など、濃まやかなお祝いの言葉が記されている。

メイベルとミス・カートメルの間には数多くの書簡が行き来したようで、それらはカナダ合同教会のアーカイブその他に納められている。



日本からのカード



創立30年記念に作成された東洋英和女学校の絵葉書セットの外装。中の絵葉書の実物は史料室にも一部しか残されていない。

2. ミス・カートメル宛ての書簡

* 日本からの書簡

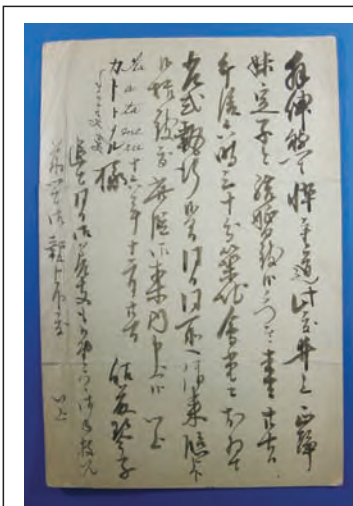
卒業生と思われるハシグチさん、女学校の教員であった水野峯子、第1回卒業生で教員となった渡辺里雨（旧姓若林）、齋藤春子、小林光泰の息子の光（麻布学園英語教諭）、静岡教会初期の牧師米山定昌の息子豊等の名前が見られる。このうち数通は純和風風景画の描かれたグリーティング・カードを用いている。

ミス・シンプソン（Myra E.Simpson）は甲府から近況報告を寄せている（1922年）。先述の小林光氏とミス・シンプソンの二人とも、Proverbs（聖書の「箴言」）を大量に送られたことへのお礼を述べている。「箴言」の英語版を送られ、教会学校の生徒らに配ったということからすると、葉のようなものだったのであろうか。ミス・カートメルは伝道に役立つ贈りものをはるばる郵送したと思われる。

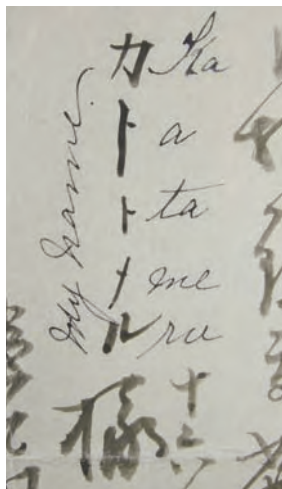
* 最も古いもの—1883年12月21日付、佐藤重道（顕理）氏の結婚式の通知

佐藤顕理は日本におけるカナダ・メソジスト派最初の受洗者の一人で英学者、のちロイター通信員として活躍した人物である。翌1884年には東洋英和学校（男子）開校時の首席教員となった。ミス・カートメルと、父親を早く亡くした佐藤家とは温かい交流があったようだ。この案内状の裏面には、簡単な英訳がつけられている。

また、「カートメル様」の横に"my name"として"ka-ta-me-ru"と読みを振ってあるのが興味深い。ちょうど来日して一年であり、おそらくカートメル本人が自分の名前の日本語での表現を覚えようとして書き込んだのではないだろうか。



佐藤顕理 結婚式の通知（1883年）



（左上部分の拡大）

拝伸然者倅重道此度井上正静
 妹定子と結婚致候につき廿七日
 午後六時三十分築地會堂におゐて
 右式執行候間同日同所へご来臨被下
 候様致度此段御案内申上候 以上
 十六年十二月廿一日
 カートメル様 佐藤琴子
 追て同日御差支も御座候ハバ御手数
 前以て御報被下度 以上

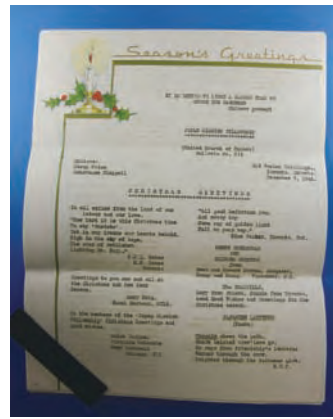
（読み起こし）



ストラチャン夫人



ロス夫人



1942年のクリスマス・グリーティング 1枚目

3. その他

* WMSの議事録やW.E.Rossの署名入りの文章

ミス・カートメルは、日本から2度目の帰国後はハミルトン市のマークランド通りに二人の従姉妹と共に居を構えた。どちらも母方の従姉妹で一人は少女時代を共に過ごしたストラチャン夫人(Elizabeth Strachan)旧姓サザランド、もう一人はロス夫人(W. Elizabeth Ross)である。ストラチャン夫人はWMSの通信担当書記、ロス夫人はWMSの会長を長く務め、二人で“The Story of the Years”(WMSの活動記録)を執筆した。すなわち、マークランド通りのその家はWMSの中心人物たちの住まいであり、おそらく多くのメンバーが出入りして報告を行ったり相談を持ちかけたりしたことであろう。

議事録と思われる記録やロス夫人の署名入りの文章が残されている。

* 1942年のクリスマス・グリーティング

「暗闇を呪うよりロウソクに灯をともし方がよい(中国のことわざ)」(抜粋)

Japan Mission Fellowship—日本に伝道に行き、太平洋戦争のためにやむなく帰国しカナダ各地に散らばった宣教師達からの約40通のクリスマスのあいさつを、ミス・コンスタンス・チャペルがまとめて1通のグリーティング・レターに仕立てたもの。

〈私達の労働の地、愛する地から追放された全ての人へ

このクリスマスの時期に“おめでとう”と言うのがどれほど難しいことか。

しかし、私達の心は高く希望の空を見、ベツレヘムの星が富士山を照らしているのを夢に見ています。

C.J.L.ベイツ、H.E.ベイツ)

〈一人ひとりにクリスマスの挨拶を送ります。戦争で引き裂かれ、悲しみで満たされている世界では、他の人の幸せを祈るのはふさわしくないようにもみえますが、主は私達ができるかぎり落ち着いて幸せできるように望んでいると信じ、昔と同じ挨拶を送ります。

クリスマスと新年おめでとうございます。“地に平和、御心に適う人にあれ”が早く私達の世界に実現しますように。

アリス・ストラザード)

〈日本ミッションの皆さんへ。心よりクリスマスと新年のあいさつを一人ひとりに送ります。

私たちは散らされた仲間ですけれど、日本に住み、主に仕えた年月の強い絆で結ばれています。日本での宣教活動は戦争によって中断されていますが、多くの人たちは母国で日本人のために働く機会を与えられています。他の必要とされているところで違う活動をしている人もいます。

退職していても今も主に仕えるために活動していても、私たちは前途を恐れずに、“神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ります。”

豊かな命であり、救い主であり、変わらぬ私たちの友である、言葉にできない贈り物である

キリストを与えられたことを神に感謝します。それ故に、キリストは“信じている私たちにはかけがえのないものです。”

A.E.プレストン)

〈日本ミッションの皆さん クリスマスおめでとうございます。〉

私は25人の子供たちの母になりました。19人の日本人と残りの6人は4つの国籍に分かれるカナダ人です。イソベル・リースが父親です。

多くの喜び、しばしば驚き、ときどき“問題”があり、たまに感動があり、常に挑戦しています。

クリスマスがこのような時代でも本当の喜びをみなさんにもたらしめますように。

レオナ・ダグラス)

C.J.L.ベイツは関西学院院長だった方であり、ストラザード、プレストン、ダグラスはいずれも東洋英和・静岡英和・山梨英和の二校以上で教え、前者お二人は校長を務めた。全体の発信者のほとんどは三英和や上田保母伝習所で教えたり、宣教師館に暮らしていた方々である。ミス・ダグラスとミス・ハードはカナディアンロッキー山麓の寒冷地で日系人のための学校で教えている報告を書いている。

それぞれの悲痛な祈りが胸を打つ書簡である。

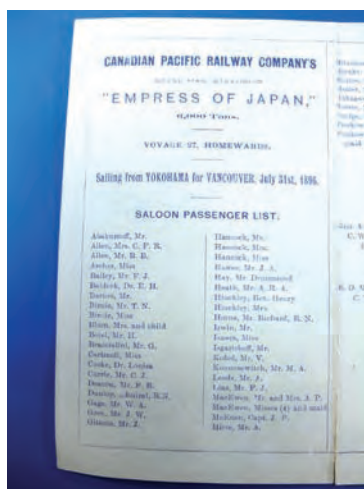
おわりに

以上、今号では史料室に託された遺品の数々からごく一部を紹介したに過ぎない。このようなミス・カートメルや学院の歴史に立ち会った人々の足跡をたどることは、学院の掘って立つところを再確認することにつながるのではないかとの思いでいっぱいである。まだ書簡の解読や翻訳は端緒についたばかりであるが、作業を進めて、資料集のような形で公開したいものと願っている。

これまで英文書類の読み起こし、翻訳に協力くださった方々は、中学部長（英語科）の露木美奈子氏、英語科教諭の楠山真里子氏、福本久子氏、元教諭の大井真理子氏、カイル・ティマー氏、松田昭彦氏、大学教授のスイッペル氏の諸氏である。また、旧字の読み起こしは法人本部の田原綾子氏による。深く感謝するとともに、今後もさらなる協力者を募って作業を進める計画である。

なお、本部・大学院棟1階ロビーでは、これら遺品の展示を11月下旬より来年5月まで行う予定である。本物の資料をぜひご覧いただきたい。

(史料室 酒井 ふみよ)



1896年7月31日横浜発バンクーバー行き 蒸気船“Empress of Japan”の乗船名簿 (ミス・カートメル2度目の来日の帰国便。右のリスト左、下から8行目に名前がある)

〈思い出の先生がた〉24 清野 禮先生

一枚の色紙

早いものです。清野禮先生が主に召されたのが2003年8月9日のことですから、今年で9年目になります。

私は、清野先生が中学部部長として働いておられた時、その部屋の壁に一枚の色紙が額に入れられて掛かっていたことを、未だに強く記憶しています。それは、清野先生の母校、東京女子大学の学長であった、安井哲先生の色紙でした。恐らく、ご自分の座右の銘とされていたのでしょう。それは、マタイによる福音書9章37節の聖句、

収穫はおほく労働人は
少しこの故に収穫の主は
労働人をその収穫場に
遣し給はんことを求めよ
という言葉でした。

安井哲先生は、女子大の学長辞任の後、戦時中1941年（昭和16年）、求められて東洋英和女学校の校長代理となり、1942年（昭和17年）より校長事務取扱となり、戦時下で英和を指導されました。キリスト教主義教育を守るためのその労苦がどれ程大変であったかは、想像するに余りがあります。そのこともあって、安井先生の書かれた色紙とその聖句を、清野先生自身の座右の銘とし、自分なりに英和に仕えたいと願われたのでしょう。清野先生は、この座右の銘に記されているように「労働人」として生涯を全うされようとしたのでしょう。事実、そのようになされました。

私は清野先生と接して30年余り、先生の後を追うように共に仕事をさせていただいたことを感謝しています。時には励まし合い、時にはなぐさめ合い、清野先生は私の良き先輩でした。時には議論もしましたが、最後は、共に働き人として互いに支え合うことが結論でした。その間いつも感動的であったことは、清野先生が、在校生は当然のことながら、如何に卒業生一人ひとりのことまで配慮していたかということです。

教科の数学は分かりやすく合理的であり、包容力にあふれたお人柄で、クラスの生徒達から「学校のお母様」と慕われました。



清野 禮先生

多くの人々がご存じのように、清野先生は「猫好き」で有名でした。猫のハンカチーフ、袋、アクセサリ等、数えきれない程の猫の小物を持っておられました。ペットの「ミーコちゃん」は最高の食事を与えられ、堂々とし凛とした立派な白い猫に育ちました。学校で、ある時、「ミーコちゃん」と偶々呼ばれて「おや？」と振り返ると「ごめん。我家のミーコとあなたの名前（ミエコ）とを間違えたわ。」とコロコロと笑われた時のお顔が今でも懐かしく思い起こされます。

清野先生が生涯を通して、教育者として、キリスト者として徹せられたことは、実に素晴らしいことでした。清々しい思い出として、心の中に残っています。これは、私だけではなく、清野先生と共にキリスト教教育の業に尽くした方々も同様であったと思います。

文 雨宮 美枝子（元中高部教諭）

清野 禮（きよのれい）先生

一略 歴一

1935年6月19日 東京市麻布に生まれる
1948年 東洋英和女学院中学部に入学
1957年 東京女子大学数理科卒業
東京女子大学数学研究室助手を経て
1961年 東洋英和女学院中高部に就任
(担当: 数学)
1985年 高等部教頭就任（～1994年）
1994年 中学部部長就任（～2000年）
2003年8月9日永眠（享年68歳）

*『神を思ふ清らけきもの 清野禮先生遺稿・追悼文集』はまだ残部があります。ご希望の方は史料室までご連絡ください。

主な受贈資料

- * 周年記念品（盆、ペン皿、しおり、記念バッジ、ペーパーナイフ）
- * 手製恩物 積木
- * 卒業アルバム（高女科1941、高等部1952・1984・1988・1991・1992・1996・2012）
- * 卒業記念品（水晶の印鑑）
- * コーティングされた北米の楓の葉
- * プログラム（小学部講堂献堂式1960、（合同）卒業授与式1954、高等部1960、創立七十五周年記念祭1959、クリスマス礼拝1959中1・2）
- * 名簿（小学部1948、1951～1953、中高部1954～1959）
- * 行事しおり（小学部夏期学校1953、野尻キャンプ1957）／「camp songs」（寄せ書き入り）
- * 「小羊」第四號～第九號、No.10～No.13
- * 「最上の業」（長岡輝子朗読）CD、「TOYOEIWA 2011 Graduation Anniversary」DVD、「風にそよぐうつくしきもの2012」CD、「東洋英和女学院の思い出」（1970年卒学年会）CD
- * 大中寅二氏関係（楽譜「若草」「葛葉集」「子守歌 お日さましずめば」、作品の会プログラム1965～1974・1977・1979・1983、文集「芦ぶえ」28、冊子「日記」より）
- * 松田多賀子氏、シオン会関係資料
- * 幼稚園師範科でのノート・テキストなど
- * 『幼児心理学』（戦後すぐ保育専攻部のテキスト）
- * 『選集さんびか』（小学部作成）
- * 1996年高一カンファレンス（宿泊第1回）資料
- * 「あたりまえのこと」長野静江著（元短期大学講師）
- * “The Red Letter New Testament”（松尾芳子氏所蔵。ミス・ハミルトンのお土産。サイン入り）／“Texas of My Heart”黒澤清子著（高女科卒）
- * 『敬虔者たちと〈自意識〉の覚醒』“Begeisterung und Ernüchterung in christlicher Vollkommenheit”森 涼子著（高等部卒）
- * 『希望の祭典・オリンピック』原田知津子著（高女科卒） 幻冬舎
- * 『聞く力』阿川佐和子著（高等部卒） 新書
- * 『馬込文士村ガイドブック』／「月刊おとなりさん」Vol.350（片山廣子関係）

- * 「東奥日報」2012.8.2・9・16・23夕刊（佐々木多門氏の連載 創立初期の画像掲載）
- * 「軽井沢ナショナルトラストだより」No.7・19／『ショーさん物語』
- * 『喪われたレーモンド建築 東京女子大学東寮・体育館』工作舎
- * 『チェルノブイリ 家族の帰る場所』朝日出版社
- * 『雛の宴』『赤毛のアン』
- * 『エリザベス朝演劇の誕生』井出新氏（元短期大学助教授）論文所収
- * 『父のグッド・バイ』井岡道子著
- * 『白銀教会100年史』
その他 他大学 年史・紀要 等多数

主な移管資料

- * 卒業アルバム（保育専攻部1951、短期大学1968～1970・1977英・1980保・1987・1989・1991・1995、大学1999） 大学図書館より
- * 外崎長三郎先生関係（小学部紹介英文キャプションアルバム、絵葉書、冊子、写真など）
小学部部長室より
- * 富岡正男先生関係（楽譜など多数）／戦後すぐの教科書「家庭」「食物」「家庭看護」／親和会記録1979～1981 中高部より
- * 『羊飼いの立場から詩篇二十三篇を学ぶ』『長野先生のお祈り他』カセットテープ／「短期大学校舎新築工事」工事記録（図面）
書庫より

購入資料

- * 『リゾート軽井沢の品格』宮原安春著 軽井沢新聞社
- * 『教会が見える風景 W.M.ヴォーリズの足跡』荒川久治編著 地域デザイン研究所

（訂正とお詫び）

No.78 p.8・p.11中

"Canadian Woman Missionaries at Toyo Eiwa ……"の下線部が抜けていました。

（お知らせ）

史料室では、学院の歴史や学生生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。ご家庭にあってご不要のものがありませんら、ご寄贈いただけると幸いです。

お問合せ先は下記のとおりです。

東洋英和女学院史料室（法人事務局内）

Tel 03-3583-3166（直）Fax 03-3583-3329（直）

E-mail : archive@toyoeiwa.ac.jp